



「野田弘志氏 日向寺監督・清水キャメラマン鼎談」

2013年9月30日、日向寺太郎監督による野田弘志画伯のドキュメンタリー映画『魂のリアリズム 画家野田弘志』のクランクアップを記念して、『爆心 長崎の空』をだて歴史の杜カルチャーセンターで上映しました。上映前に先立ち、日向寺監督と清水キャメラマン、野田弘志画伯による鼎談が行われました。この鼎談では、日向寺監督も野田画伯も「美とはなにか?」のテーマについて絵と映像でそれぞれ追求していく、通底する精神は同じであることをお話をされました。

永山：——日向寺監督と清水さん、野田先生のドキュメンタリー映画の撮影が終了したと伺いまして、まずはお疲れ様でした。

去年の5月から撮影が始まったとご紹介ありましたけど、撮りためた映像の編集をこれから作品としてまとめ上げていく作業が残っていますね。



司会 永山優子

新世代を代表する正統派写実画家。だて噴火湾アートビレッジアートディレクターとして絵画教室「野田・永山塾」で画家の育成の指導にあたっている。



画家 野田弘志

現代日本を代表する写実画家。だて噴火湾アートビレッジ芸術監督。主な作品に『TOKIJIKU(非時)』シリーズや《蒼天》など。



映画監督 日向寺太郎

仙台市出身。2005年「誰がために」で監督デビュー。「火垂るの墓」に続き「爆心 長崎の空」は監督として3作目となる。



キャメラマン 清水良雄

東京都出身。撮影として関わった作品に「老人と海」「絵の中のぼくの村」がある。日本映画撮影監督協会理事。

録り残しっていうのはないんですか？

日向寺：今日先程、つい2時間前くらいでしょうか、撮影が終わったばかりなんですね。

永山：——もうそれで撮らなくてはいけないシーンはないんですね？

日向寺：はい。一応ない予定です。

永山：——50時間にも及ぶ様々なシーンが撮りたまつたということでしたけど、せっかく撮ったものをほとんどカットするそうですね。

日向寺：その通りです。この映画が90分になるか、まあ120分を超えることはないと思うんですけど、90分とした場合に、他のシーンのほとんどは使わないということですね。

永山：——50時間引く120分はカットということで、私が登場するシーンはないんだろうなあと思つたりしますけど(笑)、沢山の要素を取り込んで取材して、そこからいらないものを削っていく行程が待っている訳ですね。野田先生、先生は絵画を創るというお仕事の中で、多くの取材をしてそこからいらないものを削っていくということはあるんですか？

野田：僕の仕事は、ともかく「いらないもの」をいかに削ぎ落とすか、「いるもの」だけにすることですから、同じですね。

永山：——50時間以上、先生は傍らずっと取材をされながらご制作されていて、それが終わってしまった。監視されることがなくなるんですけど、さみしいですか？

それともせいせいしたという感じですかね。

野田：まあ、ほっとしたと。

永山：——長い時間ご一緒していて、お二人が居てよかつたなっと思うことは何かありますか？
私はですね、お二人と知り合えたことで、人生経験も豊富で物作りをしておられる方ですから、いろんな経験談を聞いたり、おすすめしたい映画を教えて頂いて、そういうのを観たことによって、とっても自分の制作にも生きるような情報を得ることができたなあと思ってるんです。

先生は、お二人と一緒に過ごされていて、お二人と一緒にだったから良かったなと思ったことは何かありますか？

野田：仕事が僕の場合ハードですから、ちょっと休憩をする時に監督や清水さんと雑談するんですけど、結構二人とも真面目なんですよ。

僕も真面目ですから。芸術の話になっちゃうんですね。今日もドストエフスキイの話がでました。「人生で一番大事なのは美である」とドストエフスキイが「悪霊」の台詞の中で言わせているんですね。監督はもの凄く本を読んでいますからね、

僕は色々聞いて勉強するんですけどね。人生最も大事なものが美である、その美を映画という方法で追求している。「美とはなんぞや」という問題があるんですけど、僕は絵で追求している。清水さんは映像で追求している訳ですね。

だから、共通の通底する精神は同じだなあと実感しました。

永山：——沢山取材をして、いらないものをどんどん削ぎ落として、自分たちの美というものを形にしていく仕事をすることについて、この前撮影現場を見学された方とお話しする機会がありました。撮影している間、野田先生がじいーっと見つめて描いておられる所を、お二人もじいーっと、監督は映画を作る目で見ているし、清水さんはファインダーを通して見ている、みんな無言でしーんと静まりかえっている。長い時間が凄い集中力で時間が過ぎていったそうで、びっくりしました。演出で「ああしてください、こうして下さい」といった指示はほとんどないそうですね。そういったことをお聞きしまして、私もドキュメンタリー映画の作り方、行程というものは、先程野田先生がおっしゃったように通底するところが写実画を作ることと似ている気がしました。つまり相手がありますよね。撮りたいモデルだと、描きたい物だと。そういう物を見る通りというよりも、自分たちで「見た」ことを描くところに、私は共通点を感じています。

写実画っていうのは、そっくりにするために見えたことを全部描くという「見える」ことへの意識がありますが、本当は「見る」という主体的な視線が凄く大事なんです。それで形が作られる仕事なんですけど、そういうことを考えたときに、改めて御三の方々にお伺いしたいと思います。監督と清水さんは先生を撮ることがお仕事でしたし、その間野田先生は自分のお仕事をしていました。それぞれに、同じ時間でもって取り組んでいた仕事がある訳です。その時に、制作を通して相手に「何を見た」、その美というところをもう少し聞きたいんですね。「何を見た」を思いますか？

日向寺：まだ、これから編集に入る中で発見することがいっぱいあるんですけど、非常にシンプルに言いますと絵を描くことは過酷だと思いました。

こんなに大変な作業かと。勿論、今まで描かれていた絵を拝見しまして想像はつきましたけど、ここまで大変な世界かって思いました。